

# 入園期の幼児の 個人差と指導



藤村美津

幼稚園において、幼児の個人差を問題にする時、また、その指導を問題にする時、それは、教師の個人差に通ずる問題であるように思います。しかし、それが、いつまでも教師の持つ個人差の段階を越えずに云々されているのでは、幼児教育の発展はのぞめないと思います。教育は科学的に、合理的にと叫ばれている今日、なんとか、現場の私たちが、そこをとび出して、子どもたちの個人差をみつめ、指導していかねばいけないと思います。そこで、与えられた主題「入園期の幼児の個人差と指導」について考えてみましょう。

## 1、さまざまな環境

入園期（入園後、二週間前後と期間を限定します）。これは、幼稚園生活を通して、一番個人差のはげしい時期といえましょう。なぜならば、それは、子どもがそれぞれに異なる家庭の中で育ち、それ以外の環境に、あまりふれていないことに起因しているようです。

ここに最も単一な家族、父と母と子という家庭を例にとってみても、父が絶対権力を持ち、母と子がそれに従うという家庭と、母が家中の指導権をもっている場合と、子ども中心に生活が組まれている場合と、父と母が同じ立場で話し合いを行ない、子どもの教育についても同一の見解を持っている場合とでは、同じ三大家族といっても、その子どものもつ個性というものは、ずいぶん変わってくると思うのです。それに加えて、兄弟、祖父母、使用人などの人間関係、物的環境、子どものもつ体力の差、健康の状態など考え合せた個人差を、まず教師が客観的にみつめる目をもたなければならぬと思います。

## 2、具 体 例

次に、このような背景を背負って入園してきた子どもたちの集団

生活を中心にした様子をおってみました。

まず、

(1) 親から離れない子が目につきます。親も心配で、子どもから離れられないという状態です。このような場合は、まず、親に協力を求めます。そして、子どもが、幼稚園の集団生活をはじめするために、親が子どもから離れることが、一番大切なのだということを話します。

「お帰りにくいでしょうけど、どうぞ、おかえり下さい。」

「○○ちゃんは、おあずかりいたします。その代り、帰りの時間には少し早目に、必ずむかえにきてあげて下さい。」

こんなことをチャンスに、離れられない親・子を、やや機械的に離してしまいます。

「ママ、ママ」と泣きわめく一人っ子のめぐみ。「オ母サン、サビシイヨ、カナシイヨ。」となく、これも一人っ子のひろし。

「オ母サンが病気ニナル。」と心配する末っ子のたけし。約一ヶ月ぐずっていた たけしを除いて他の子はすぐになれ、母親の方が、ひよし抜けた」とこぼすほどであった。

(2) 誰かと、いっしょならいられる子どもたちはどうでしょうか。

家が近所のために、入園前から知り合っていた てつおとやすしは、手をぎゅゅつとつないで、支え合っている様子です。

また、誰でもつかまえては、「オバチャン、僕ノソバニイテネ。僕、

オバチャンノソバニイタインダ。」と話しかけているひでひろ。

こんな子どもたちには、はりつめた気持をフーと、どこかで、ゆるめてやらねばなりません。「朝、先生が乗ってきた電車、新しいステンレスだったけど、ひでひろ君、乗ったことある？」

「ウン、アルヨ、コノ間ネ——。」としゃべりはじめました。

「庭のあそこに、ブランコ、あるでしょ。あのブランコ、二人でのおもしろいよ。」というて、てつおとやすしの二人組、ふうんという顔をしてお出かけていきました。

(3) とにかく一人でいられる子どもたち。

とにかく、一人でいられるので、少なくとも(1) (2) のグループに属する子どもより立派にみえます。しかし、この子どもたちは、自分のカラからはみ出ることを、とても気にしています。親が熱心なあまり、干渉が多すぎると、子どもは自信を持ちそこない、憶病になってしまうことが多いのです。そこでまず、この子どもの中にでき上っているカラを破る仕事をしなければなりません。

汚れることを嫌うカラ。

「きちんとした、きれいなものを一番良いものと思いこんでいるカラ。」

おとなの考えることと、同じことをしていれば間違いないと思いきこんでいるカラ。

これは、絵をかけた時などによく現れます。女の子に多いチュー

リップと人形と家、男の子に多い、舟、汽車、飛行機、自動車しかかかない子、なども、このカラに入るでしょう。このような子どもたちには、『我を忘れて』とび込んでくるようなあそびを用意しなければなりません。

何が子どもたちの心をゆすぶるか、幾重もの『カラ』にとぎざざれているこの子どもたちをつかまえることは、本当にむずかしい仕事です。家庭での遊びの状態、興味の対象は何か、テレビは、何を好んでみているか、一人でいる時は、何をしているか、その他細かい観察が必要です。

まさるは、この(3)のグループに入る子です。家庭では、祖母が遊びのお相手です。トランプ、花札、こま廻しが主なあそびで、勝負ごとは、大体いつも祖母が、負けてくれました。二つ年上のおとなしい姉をもち、絵をかくこと、古箱を利用しての工作など、よく一しよにつくってくれているようです。こんなまさるは、お手本が目の前にはないと動けない子になってしまいました。

そこで、まさるには、まず自分のからだをつかって、『あそぶ、おもしろき』をわからせたいと思います。ジャングルジムにのぼることだって、砂場のふちを落ちないように渡ることだって、マットレスの上でんぐりがえしだって、なんでもまさる自身のからだを動かすことによって、まさるの心を動かしていきたいとやってみました。

このグループの子どもたちは、このからだをつかった基礎あそびを非常に好み、部屋の中を、よくゴロゴロところがりまわるようになりました。

(4) 一人でいるが、非常に興味深く、人のやっていることや、園の中のことに目をむけている子どもたち。

逆なみかたをすれば、なにか、新しい環境がとまどいをさせているようです。このとまどいが、何であるか、そして、このとまどいを、どうしたらうまくのりきらせてやれるかが、指導のポイントになると思います。

毎年私は、この(4)グループの子どもたちのとまどいを知ることにより、次の年の環境設定の示唆を得ています。

毎朝、幼稚園にやってくると、自分の所有物(下駄箱、帽子かけ、道具入れのひき出し)を点検して歩くちえ子。庭の木によりかかって、自分の胸についている名札を、一字一字よんでいるのもちえ子です。

いつもニコニコしながら、ともだちのあそびをながめ、ゆうゆうとしているのですがあそばないのです。仲間に入っていけないのです。このきっかけを、どうつけたら良いかとあせります。

放っておいて、自分であそび出すチャンスを待つというの、指導の一つの方法だと考えます。この待つ、ということが、この(4)のグループの子どもには、とても大切なことのように思えます。しか

し、一方、なんらかの方法で、このチャンスを積極的に与えてやる  
ことができたならと劇あそびにきそってみたり、おにごっこにきそっ  
てみたりしましたが、他のグループに比べて、非常に時間がかかり、  
子ども自身が成長したのか、教師の働きかけに効果があったのか、  
評価がたいへんあいまいになってしまいました。これからも研究して  
いきたい問題です。

(5) 自分の気にいった遊具で遊ぶ子どもや、ともだちのまねをして  
あそぶ子どもたち。

この(5)のグループに分類できる子どもたちは、入園期には、指導  
をさほど必要としない子どもたちです。基本的な生活のしかた、最  
少限の規律は守る意志が育っています。そこで、この子どもたちに  
は、幼稚園でのくらし方を身につけていってもらいます。

「あそこに出しっぱなしになっているくつ、誰れのかな？」という  
話に、きつと反応をしめして、自分のでも、自分のでなくとも、一  
応みにいくまきひろ。

「オイ、誰レノダヨ、コノクツ。」とぶらさげてきては、級のみんなに  
聞いている。こんなことから、他の子どもたちも、ともだちに  
関心をもち始めるチャンスになったら、と思います。

また、ひとりで、なんでもこつこつやる 和子や いさおは、ど  
うでしょうか。

お行儀はいいし、いわれたことは、なんでもきちんとしてくれるので

す。他人に迷惑になる行動は一つもせず、おとなしい子どもです。

こんな子を、よく、「お母様方は本当にいいお子さんで、」などと  
評価しています。いわゆる手のかからない子なので、つい教師もい  
い子と思いがちです。しかし、私たちは、このようにしつけのよく  
かかった、おとなを小さくしたような子どもに育てることを目標に  
しているのでしょうか。

規格品、まさに、オートメーションでつくられたような個性のな  
い子ども、こんな子どもを育てておいて、これをいい子と評してよ  
いのでしょうか。

ここで、注意して考えなければならない一つの問題にぶつかりま  
す。

個人差の指導ということは、子どもたちの個人差を教師がよく分  
析し、知るだけでなく、子どもたちを、どんな子どもにも育てたい  
か、そのために、どういう教育をしたらよいか、という児童観や、  
教育観にまで、問題をほりさげて解決していくことが必要だ、とい  
うことです。

教師が、教育の目標をしっかり持ち、その目標にむかって、ご  
まかしやすりかえのないじみな指導を、ひとりひとりの子どもにす  
るとき、それが、個人差の指導になっていくと思います。

(東京・平塚幼稚園)